

カフカの「迷宮悪夢の方法」

後藤明生著

岩波書店 B6変判 二二七頁 一、三〇〇円

小説家のなかには、生前から高い評価を受け、多くの読者を得る者もいれば、生前はほとんど評価されず、没後に初めて世に認められるという者もいる。フランツ・カフカは後者の好例として知られている。さらに彼の場合、そうなるに至った事情が実にユニークなことでも有名である。カフカは、生前に幾つかの短編小説を発表しただけでこの世を去るのだが、その死に際して、友人のマックス・ブロー

トに草稿、手記などの一切を焼き捨てるよう遺言した。ところがブロートは、その未完の作品が持っている文学的な価値や問題の衝撃性を直観し、故人の遺志に反して、それらを自らの手で編纂し出版した。そして、それから約二〇年を経て、生前には誰も予想しなかった、爆発的なブームを引き起こしたのだ。本書は、カフカ研究者でもなければドイツ文学者でもないひとりの小説家が、カフカから受けた衝撃について述懐しながら、カフカの小説原理や小説の方法についてまとめたものである。当然、著者自身も小説家なのだから、自分なりの原理・方法はあ

る。だから、著者自身も小説家なのだから、自分なりの原理・方法はあ

る。だから、著者自身も小説家なのだから、自分なりの原理・方法はあ

る。だから、著者自身も小説家なのだから、自分なりの原理・方法はあ